

# 競技会場や道路整備のその後

## ～あの施設、あの道路はどうなった？～

富樫 均

五輪関連施設には様々なものがあります。その中で、自然保護との関わりで注目を集めた野外競技会場と会場間を結んだ主な道路について、施設の管理者へのヒアリング調査と現地調査により現状を調べ、建設当時の資料等を加えて環境配慮の面から考察しました。

### 野外競技会場は・・・

新しく建設された多くの競技会場では、後利用が課題になっていました。その理由として、ボブスレー・リュージュ競技（図1）やバイアスロン競技のように、極端に国内競技人口が少ない競技があったことや、五輪競技用に設計されたコースでは、一般の人が利用しにくいということがありました。いくつかの施設では、春～秋にかけてメイン会場に芝を張ってサッカーグラウンドとしたり、一部の敷地内で自然体験活動やMTB（マウンテンバイク）に利用したりするなどの工夫もされています。しかし、ほぼすべての施設において年間の支出に対する収入がマイナスで、所有する自治体にとって施設の維持管理が財政的な負担になっています。10年が経過し、施設の老朽化も目立ってきました。

また山林の中に造成され、日常の利用が少ない競技会場では、2008年秋からイノシシによる芝生などの掘り起こしによる新たな被害が出てきました。近年イノシシやシカは県の北部に分布を拡大しており、里山における獣害問題とも関連し、今後深刻な問題になる可能性があります。

### 主な道路のその後は・・・

会場を結ぶ道路の多くは環境アセスメントの対象になりませんでした。自然の改変規模は決して小さくありませんでした。唯一環境アセスメントの実施対象となった志賀ルートの道路では、山岳地域をトンネルで貫いた際に、想定外の酸性地下水の湧出があり、それが近くの

河川に現在も流入し続けている例が確認されました。また浅川ルート（長野～飯綱ルート）では、道路が整備されて以降、高原一帯において急激な宅地開発が進みました。

### オリンピック関連施設の建設と環境保全

オリンピックはわずか2週間程度で終わってしまいますが、施設が地域に与える影響は半永久的に続きます。長期的に見ると、競技会場の建設は、財政や社会や環境の面で様々なリスクを伴います。「新設」に対して「既存施設の改修」を選択することは、少なくとも環境への負荷を抑制するには有効で、同時に後利用の点でも有利と考えられます。五輪のような大規模な催しにおいては、計画段階で環境への負荷について慎重に検討する必要があります。

- (1) 可能な限り、既存施設の活用をはかる
- (2) なるべく大会後のリサイクルを考えた仮設構造物とする
- (3) 施設を新設する場合は、市民利用を念頭に多目的施設として設計する

道路整備にともなう自然改変はかなり大規模になりましたが、五輪のような催しでは競技会場にだけ興味や関心が集中しがちです。そのため、道路が自然に及ぼす影響は環境配慮上の盲点になりかねません。五輪に関連の深い道路の場合には、切れ切れに計画された個別の改良工事というよりも、相互に関連する一連の集中工事として、競技会場と同等の配慮や対策がとられることが望まれます。施設整備全体に共通していえるのは、会場配置など大会の基本構想が決定される前のなるべく早い時期に、自然と社会の両面にわたる総合的な環境配慮を行うことがとても大事であるということです。



図1 ボブスレー・リュージュ会場（長野市）



図2 クロスカントリー会場（白馬村）